

野幌森林公園
自然観察ガイドブック

*Nopporo Forest Park
Nature Watching Guide Book*



北海道ボランティア・レンジャー協議会

「野幌森林公園自然観察ガイドブック」正誤表

場 所	誤	正
p 2下から右4行目	[33頁の5)引用・参照	[33頁の5]引用・参照
p 3右上2行目	も じ め 台 層	も め じ 台 層
p12右下	支 文 別 線	志 文 別 線
p12松川の池右	四季美コース(1.5km)	四季美コース(1.5km)
p28上から13行目	園 体	園 体
と下から13行目	園 体	園 体

はじめに

最近、森林内の植物・動物に関心を寄せ、観察会に参加したり自ら自然に関わろうとする人たちが増えつつあります。自然に親しみつつ自然保護や保全の啓発を進めている北海道ボランティア・レンジャー協議会では、多くの人たちに自然のすばらしさを知ってもらうための調査や研修を行ってきました。

この自然観察ガイドブックは、私たちの観察会の主たるフィールドとしている野幌森林公園の調査研修の集成であり、野幌森林公園を肌で感じてもらえるよう心がけ作成しました。

野幌森林公園という特定の場所にしばってありますが、各地での観察会にも応用できるよう工夫をこらしてありますので、本書を活用していただければ幸いです。



自然観察ガイドブックの特色

- ・本会の会員が調査した結果をもとに、自然を慈しみ保護する立場で植物、動物名を記載してあります。
- ・大きく三部構成にしております。興味のある分野だけでも活用できるよう編集しました。
- ・各項目が関連した内容になるよう配慮し「採取しない観察会」すなわち、自然保護保全の精神の視点で執筆しました。
- ・初めてコースを歩く人にも利用しやすいように、コースガイドとコースマップを対比して見るができるようにしました。
- ・本書を手にも、気軽に野幌森林公園に足をはこぶことができるように内容を考えたり、持ちやすいようハンディ版としました。

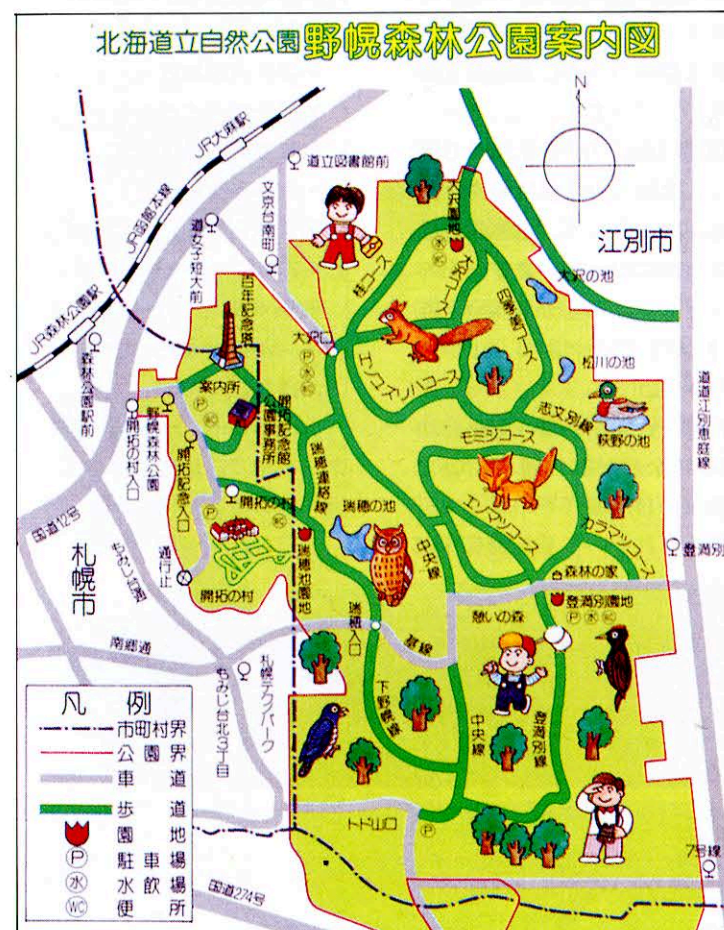
目 次

1. 野幌森林公園ガイド	1
2. 野幌森林公園地形と地質	2
・位置と地形	2
・野幌の語源	2
・地 質	3
・公園内の池	4
3. 動物たちの生活	5
・森林の野鳥	5
・昆 虫	8
・中小哺乳類、爬虫類、両生類	9
4. コースガイド	10
・大沢口～エゾユズリハコース～四季美コース～大沢園地	10
・大沢口～大沢園地～カツラコース	14
・瑞穂幹線～瑞穂連絡線コース	18
・開拓の沢コース	22
・野幌森林公園見聞トピックス	26
5. 観察会へのアプローチ	29
・自然保護と自然観察	29
・観察会の運営	30
・インタープリテーション	32
6. 動物・植物写真一覧	33
7. 参考及び引用文献	34
8. 編集後記	35

野幌森林公園ガイド

森林の中に入ると、季節によりまた時刻やその日の天気によって、さまざまな顔を見せてくれます。「森林は人類の母である」との言葉があります。森林は人間の体と心の健康、そして生活に欠くことのできない恵み与えてくれます。その事実を具体的に確認できる場所、それが森林公園です。

野幌森林公園、それはかつての原始林の姿を色濃く残しているすばらしい自然なのです。



[34頁の4) より転載]

野幌森林公園地形と地質

(1) 野幌森林公園のあらまし

■位置と地形

野幌森林公園は、1968年（昭和43年）に北海道開拓百年を記念して造られ北海道立自然公園に指定されました。

位置は、札幌市の中心より東方約11～15キロメートルにあり、札幌市、江別市、北広島市の3市にまたがる野幌丘陵に広がっています。

公園の標高は海拔30メートルから80メートルで、公園の中ほどにやや小高い丘が南北方向にはしり、全体的にはゆるやかな台地になっています。土の性質は全体としては粘土分が多い土質です。公園の総面積は、2,051ヘクタールあります。

公園内には、百年記念塔、開拓記念館、開拓の村などが設けられています。また散策や自然観察等のコースがなん本も巡らされその多くが国有林内

で占められています。

■公園内区域

公園の区域は、それぞれの制度の目的に従って、自然休養林、保安林、鳥獣保護区などにも指定されていたり、公園管理の目的に沿って、記念施設地区、森林保全地区、緩衝緑地地区の区域にわけられています。

・記念施設地区

公園を利用するセンター的な役目はたしている地区です。

・森林保全地区

国有林を中心に、道有林などを含めた1,739ヘクタールの森林です。

散策や観察または森林浴を楽しむコースが巡らされています。

・緩衝緑地地区

公園の南端にある国有林にはさまれた民有地で、周辺の都市化の波から公園を守る役目を持つ地区です。

[33頁の5) 引用・参照]



【野幌の語源】

野幌の語源は、アイヌ語で「ヌボロベツ」すなわち「ヌブ・オル・オ・ベツ」で「野の中の川」に由来していると言われています。そして、下の方が略されて、単に「ヌボロ」とよばれていたのが、和人に受け継がれて「ノボロ」となったのだらうと言われています。

(2) 地 質

野幌丘陵は、約2百万年前から80万年前くらいの間に海底にたまった泥や砂などの堆積物がその後の地殻変動のために隆起し土台が形成されました。

その後、野幌丘陵は人類の時代と呼ばれる更新世の終りころまでに、隆起と沈降を繰り返しながらほぼ現在の形に近い丘陵になりました。

更新世に堆積した地層を具体的に見ると、一番下位の地層から、裏の沢

野幌丘陵の地質時代区分

時代	地 層 名	気 候
完新世		
	1万年前	
更新世後期	広島砂礫層	寒冷
	江別砂層	
	元野幌粘土層	
	支笏火山噴出物	
	小野幌層	
更新世中期	6万年前	温暖
	もみじ台層	
	13万年前	
更新世前期	竹山礫層	温暖
	音江別川層	
更新世前期	40万年前	寒冷
	(水期)	
	80万年前	
更新世前期	下野幌層	温暖 冷涼
	120万年前	
更新世前期	裏の沢層	
	200万年前	

層、下野幌層、音江別川層、竹山礫層、もみじ台層、小野幌層などに細分されます。

■裏の沢層

この層の厚さは50メートル（十一）と言われています。最下部層は江別市大麻付近の高速道路工事の際確認されています。最上部は軽石質中粒砂層ないし粗粒砂層となり、瑞穂池周辺に分布するので、瑞穂池浮石質砂礫層とも呼ばれています。

■下野幌層

裏の沢層の上位に不整合関係^①で累重した地層であり、前項更新世の中頃～末期のものです。北部域のもみじ台団地と北広島市西の里団地の境界域を流れる野津幌川流域に分布していて、東翼では厚さ50メートルであるのに対し、西翼のそれは200メートルと厚く分布します。また、大曲川沿に分布するこの層は亜炭^②が含まれ、太平洋戦争の頃燃料資源として採掘されていました。

■音江別川層

音江別川層は、音江別川流域のみに分布していて、基底分布高度は40～60メートルです。下位の裏の沢層や下野幌層が緩やかに傾斜した地層なのに対し、音江別川層は水平に堆積した地層です。

このような関係は傾斜不整合^③と呼び、同様な関係は石狩・馬追の丘陵でもみられます。

■竹山礫層

野幌丘陵のいちばん高い場所、北広島市竹山付近に分布しています。

下位の音江別川層を不整合で覆い、きぶつ類の「くされ礫」^④を主体とする礫層（最大の厚さ2m内外）からなっています。

■もみじ台層

昭和40年代にはじまった厚別区もみじ台団地の造成工事によって、野幌丘陵西部域の地層が詳細にわかってきました。基底分布高度は、12～15メートルもしくは20～30メートルと場所によって異なります。下部は数センチ～数十センチの安山岩礫を主体とした基底砂礫層、上部は斜交葉理^⑤の発達した中粒砂層と砂礫層からなっています。

(注)

- ① 不整合関係……ある地層が堆積後に隆起し、陸上で風化したり削剥作用を受け、その浸蝕面上に新期の地層が堆積したとき、両者の関係を不整合という。
- ② 亜炭……石炭化度の最も低い石炭。ふつう黒褐～帯褐色。
- ③ 傾斜不整合……上位と下位の地層の層理面の走向、傾斜が異なる不整合。
- ④ クサレ礫……強度に風化した礫層で、ソフト礫とも言われる。スコップで容易に切り取ることができる。
- ⑤ 斜交葉理……周囲の地層の主要堆積面に斜交する堆積面を持つ層構造。水没や風による堆積物の移動に伴って形成される。

(3) 公園内の池

野幌森林公園内には、いくつかの池や溜め池があります。瑞穂の池、大沢の池、松川の池、萩野の池、原の池、桜沢の池などが点在しています。これらの池の多くは、かつて水田耕作のた

■その他の層

もみじ台層で代表される最終間氷期の海面上昇期の地層が堆積した後、海退とともに最終氷期の堆積物が堆積を始めます。それは、下位から小野幌層、支笏火山噴出物、元野幌粘土層、江別砂層、厚別礫層と呼ばれています。

小野幌層の上層、支笏火山噴出物の層は、およそ3万6千年前から3万年くらいの間続いた、支笏火山の噴出による支笏系火山灰です。

支笏湖は、この支笏火山の大規模な噴出によって陥没したところでできたカルデラ（スペイン語で「鍋」）湖として有名ですが、野幌丘陵にも大きな変化を与えました。

[34頁の7) 引用・参照]

めの池としての役割を担っていました。特に、瑞穂の池は昭和3年、かんがい用水の貯水池とし完成し、実り豊かな水田を願い命名されたものです。これらの池は、今公園を訪れる人々や水鳥の憩いの水辺となっています。

動物たちの生活

(1) 森林の野鳥

野幌森林公園には森林性の野鳥を中心に34科約120種が観察・記録されています。

野鳥の観察は、季節や天候、地形や樹種により観察できる野鳥の種類も出現率も大きく変化します。

天候にめぐまれた日の午前中、下記の観察コースを歩けば、どんな野鳥が

現れるでしょうか。一つの目安として出現率を見てください。

出現率の数値は次の表にしました。

[10回観察コースを歩けば

8～10回観察できる] = 9/10

いつも観察できる	～9/10～
良く観察できる	～7/10～
普通(2回に1回は観察できる)	～5/10～
ときどき観察できる	～3/10～
滅多に観察できない	～1/10～

観察コース

- ・ 瑞穂連絡線 —— 瑞穂の池 —— 開拓の沢コース —— セキレイ橋 —— 開拓記念館
- ・ 大沢口 —— エゾユズリハコース —— 四季美コース —— 大沢コース —— 大沢口

■雪に埋もれた森林の野鳥(1月～2月)

深い雪に埋もれた森林は、樹木により風が弱められ、多くの木々が葉を落として見通しがよくなっていますので、歩くスキーがあれば野鳥観察には適した時季です。

カラ類やキツツキ類など、留鳥として通年観察できる野鳥をしっかりと確認

でき、ツグミやレンジャク類などの冬鳥観察ができます。

また、このシーズンの楽しみは、カラ、キツツキ類等が混群をつくり採餌しているのを観察できることです。日溜まりで数十羽、10種をこえる野鳥に囲まれると、寒さを忘れてしあわせな気分になります。

和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシトガラ	～9/10～	ヒガラ	～7/10～	シメ	～3/10～
シジュウカラ	〃	シマエナガ	〃	アトリ	〃
ゴジュウカラ	〃	オオアカゲラ	〃	マヒワ	〃
アカゲラ	〃	ヤマゲラ	〃	ヒレンジャク	〃
コゲラ	〃	ミヤマカケス	〃	ムクドリ	〃
ヒヨドリ	〃	ハシトガラ	〃	クマゲラ	～1/10～
トビ	〃	ハシボソガラス	～5/10～	ノスリ	〃
ウソ	〃	スズメ	〃	オオタカ	〃
ツグミ	〃	キバジリ	〃	ハイタカ	〃
ヤマガラ	～7/10～	キクイタダキ	〃	フクロウ	〃

(14科 30種)

■若葉につつまれた森林の野鳥

(4月下旬～6月上旬)

夏鳥が次々に飛来し、冬鳥が少しずつ北に向かって旅立つ時季です。

新緑の森林では、野鳥たちの「さえざり」ディスプレイそして営巣とめまぐるしく活動するシーズンです。

なお、3月下旬から5月は、冬鳥と

夏鳥の出入りが多く、一週間前には一羽も確認できなかったキビタキやセンダイムシクイが森にあふれるように「さえざり」を聞かせてくれることがあります。

若葉の森は、オオルリ・アカハラ・クロツグミなど森の名歌手の大ホールなのです。

和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシブトガラ	～9/10～	ニュウナイスズメ	～9/10～	ホオアカ	～5/10～
シジュウカラ	〃	ウグイス	〃	ツグミ	～3/10～
ヒガラ	〃	ヤブサメ	〃	アカハラ	〃
ヤマガラ	〃	センダイムシクイ	〃	ウソ	〃
ゴジュウカラ	〃	キビタキ	〃	マヒワ	〃
シマエナガ	〃	アオサギ	〃	オオジシギ	〃
アカゲラ	〃	ヤマゲラ	～7/10～	ツツドリ	〃
コゲラ	〃	オオアカゲラ	〃	カッコウ	〃
ヒヨドリ	〃	ムクドリ	〃	ルリビタキ	〃
スズメ	〃	シメ	〃	ミソサザイ	〃
トビ	〃	イカル	〃	ベニマシコ	～1/10～
ハシブトガラス	〃	クロツグミ	〃	コルリ	〃
ハシボソガラス	〃	モズ	〃	コムクドリ	〃
ミヤマカケス	〃	オオルリ	〃	トラツグミ	〃
キジバト	〃	メジロ	〃	キンクロハジロ	〃
ヒバリ	〃	カイツブリ	〃	カワセミ	〃
ハクセキレイ	〃	マガモ	～5/10～	クマゲラ	〃
カワラヒワ	〃	オシドリ	〃	ノスリ	〃
ホオジロ	〃	ククイタダキ	〃	ハイタカ	〃
アオジ	〃	キバシリ	〃	オオタカ	〃

(25科 60種)

さえざり

自然観察会では、動きのよい野鳥をグループ全員に観察してもらうことは難しいことですが、野鳥の「さえざり」は全員で確認できる自然からのメッセージです。観察会の途中で小鳥のさえざりに耳を澄ますと「キョロイ・キョロイ…」の変化をつけて長くさえざるクロツグミを初夏の森で確認できます。このとき、観察者の感覚が森林に広がり、豊かな自然を五感で体験できると思うのです。

初夏の森林でのにぎやかな「さえざり」とともに、通年聞くことができるキツツキ類やゴジュウカラの採餌の音や、冬の森での「ぐぜり」や地鳴き等も、耳での観察としては興味あるものです。

■紅葉に映える森林の野鳥

(9月下旬～10月下旬)

コシアブラの葉が白く抜けて、ハウチワカエデのみごとな紅葉がみられるこの時季、夏鳥が次々に森を去り、冬鳥が飛来してきます。またカシラダカのようにシベリア等で繁殖し、本州以南へ渡る野鳥も観察できます。この時

季には、樹木の実を採餌する野鳥を観察できます。ホオノキの実を割ろうとしているゴジュウカラやアサダの実を食べているカワラヒワなどゆっくり見ることができます。10月下旬には森林公園やその東側に広がる石狩低地帯上空を南下する鳥の渡りも観察できます。〔34頁の9〕引用〕

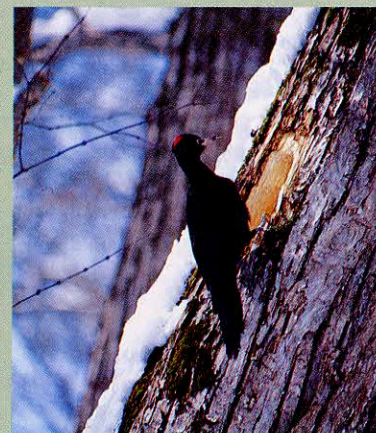
和名	出現率	和名	出現率	和名	出現率
ハシブトガラ	～9/10～	ヤマゲラ	～5/10～	ルリビタキ	～3/10～
シジュウカラ	〃	オオアカゲラ	〃	ウグイス	〃
ヤマガラ	〃	キバシリ	〃	メジロ	〃
ゴジュウカラ	〃	キジバト	〃	アカハラ	〃
アカゲラ	〃	ムクドリ	〃	マガモ	〃
コゲラ	〃	スズメ	〃	コガモ	〃
ヒヨドリ	〃	ツグミ	〃	ホオジロ	～1/10～
トビ	〃	カワラヒワ	〃	ベニマシコ	〃
ミヤマカケス	～7/10～	イカル	〃	アトリ	〃
ハシブトガラス	〃	シメ	〃	ノスリ	〃
ハシボソガラス	〃	アオジ	〃	ハイタカ	〃
ヒガラ	～5/10～	カシラダカ	〃	フクロウ	〃
シマエナガ	〃	ウソ	～3/10～		
ククイタダキ	〃	ミソサザイ	〃		

(18科 40種)

クマゲラ

森林公園では、クマゲラのなき声を聞いたり、食痕を見ることができますが、姿を見ることは非常に稀です。

飛ぶ姿はカラスを思わせる大型で、黒色で、嘴と目は黄色です。雄は頭全体が赤色、雌は後頭のみが赤色です。山地や低い山地の落葉広葉樹、針広混交林などに生息していることが多く、天然記念物に指定されています。野幌森林公園では、毎年3月にクマゲラ一斉調査が行なわれ、2～5羽確認されています。



(2) 昆虫

公園内の多種の樹木や林床植物の植生によって、沢山の昆虫が生息しています。チョウ類、ガ類、甲虫類、トンボ類のほかに、ハチ類、バッタ類、セミ類、など石狩平野に生息する昆虫のほとんどが確認できます。

■チョウ類

チョウ類はおよそ60種が確認されています。とくに、ジャノメチョウ科が多く、本州では珍しいといわれるオオヒカゲの姿も見られます。

池やため池の周辺には、アゲハ類や

【観察できるチョウ】

<ul style="list-style-type: none"> ・アゲハチョウ科 キアゲハ ナミアゲハ カラスアゲハ オナガアゲハ ・シロチョウ科 モンシロチョウ スズグロチョウ エソスズグロチョウ エゾシロチョウ ツマキチョウ モンキチョウ ・タテハチョウ科 アカマダラ サカハチチョウ イチモンジチョウ フタスジチョウ ミスジチョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・タテハチョウ科 エルタテハ ルリタテハ シータテハ クジャクチョウ ヒオドシチョウ コヒオドシ アカタテハ ヒメアカタテハ コヒョウモン ミドリヒョウモン ウラギンスジヒョウモン ・ジャノメチョウ科 クロヒカゲ オオヒカゲ ヒメウラナミジャノメ ヤマキマダラヒカゲ ジャノメチョウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・シジミチョウ科 ルリシジミ ベニシジミ ウラゴマダラシジミ ウラキンシジミ アカシジミ ムモンアカシジミ オオミドリシジミ ジョウザンミドリシジミ カラスシジミ トラフシジミ ツバメシジミ ・セセリチョウ科 キバネセセリ コチャバネセセリ イチモンジセセリ コキマダラセセリ ギンイチモンジセセリ
---	--	--



タテハ類が飛びかっています。散策路沿にはシジミ類（ウラゴマダラシジミ、カラスシジミ）の飛ぶ姿を見ることができます。場所によってはコムラサキの美しい姿も見ることができましょう。〔34頁の10引用〕

■甲虫類

甲虫類は、580種以上が確認されていますが、特にコガネムシ類が多く目につきます。マメコガネ、セマダラコガネ、ヒメコガネ、カバイロアシナガコガネやアオハナムグリのほか、稀に、キンスジコガネ、スジコガネも見られ、からだの色の変化を興味深く観察することができます。

また、ハナカミキリムシの仲間も多くアカハナ、ヨスジハナ、フタスジハナ、モモブトハナ、カラカネハナ、マルガタハナなどがノリウツギの花などに集まってきます。

観察会であまり見かけないナミテントウ、ナナホシテントウも、秋が深まる頃になると百年記念塔の内部の展望台のガラスや壁に集団を作っているのが見られます。



ハルニレやミズナラの樹液を求めて集まるクワガタ類は、ミヤマクワガタ、コクワガタなどを見かけますが、採集によって絶滅の恐れもあり、今後大切に保護していかねばなりません。その他、小さいがゆえに見落としがちな昆虫も森の営みにおいて、重要な生

き物であることを子どもたちにしっかりと伝えていく必要があります。



〔34頁の10) 参照〕

(3) 中小哺乳類・爬虫類・両生類

森林公園の周囲が開け、人家や畑が多いため大型哺乳類は住んでいません。目にする機会は少ないのですが、公園内には、キタキツネ、エゾタヌキ、イイズナ、イタチ、エゾノウサギ、エゾユキウサギ、エゾリス、シマリス、ミンクなどの動物が生息しています。ミンクは公園周辺のミンク飼育場から逃げ出し野性化したものです。

ネズミ類は、エゾトガリネズミ、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、ヒメネズミなど9種が確認されています。爬虫類では、カナヘビ、アオダイショウ、シマヘビ、ジムグリ、などが生息し、春の芽吹き頃、日当たりの良い木の枝などで日なたぼっこをしている姿を目にすることがあります。

両生類ではアマガエル、エゾアカガエル、エゾサンショウウオが生息しています。

大沢口～エゾユズリハコース～四季美コース～大沢園地

大沢口から大沢十字路までの間はわずか100メートルの距離ですが100年、200年前の北海道を思わせる林相で、ハルニレ、ハリギリ、カツラなどの巨木がたくさん残っています。

ハルニレやハリギリにはイワオモダカが着生しています。

十字路から右に入ると、樹高28m直径133cmの北海道名木百選に選ばれたカツラがあります。

明るい感じの林の中を進むと左側にヤドリギの多い林があらわれます。秋になると小鳥の混群がよく観察される場所です。道が左にカーブするあたりには、ネコノメソウやオトギリソウも見られます。



このあたりのトドマツの根元にクマゲラの食痕があります。道路の反対側にあるのでまわりこまなければ見えませんが、低いところにあるので良く観察できます。クマゲラの食痕は大きな舟堀型で、荒々しい皮はぎの跡や木くずが見られ、他のキツツキのそれと区

別できます。

ハイイヌガヤやエゾユズリハの群生を見ながら進むと、T字路にでます。ベンチもあるので、ひと休みできます。



左へ行くと大沢園地方面、右へ行くと、松川の池や登満別園地へぬけることができます。

右側の道を進んで沢を横切るところのハリギリの巨木には昔、クマゲラが営巣したこともあります。最近では使われていないようですが、ここではオンドリが営巣したこともあります。



しばらく歩き、坂を下り始めるとまたT字路にでます。まっすぐ進むと登満別園地に行きますが左側にまがって



四季美コースに入ります。このあたりでは、ツバメオモトを見ることができます。T字路から松川の池まで秋の紅葉の美しいところです。松川の池を右に見ながら大沢の池に向かって右側のトドマツ林の中にサカナランがあります。大沢の池に流れ込む沢のところでは、運が良ければカワセミを見ること

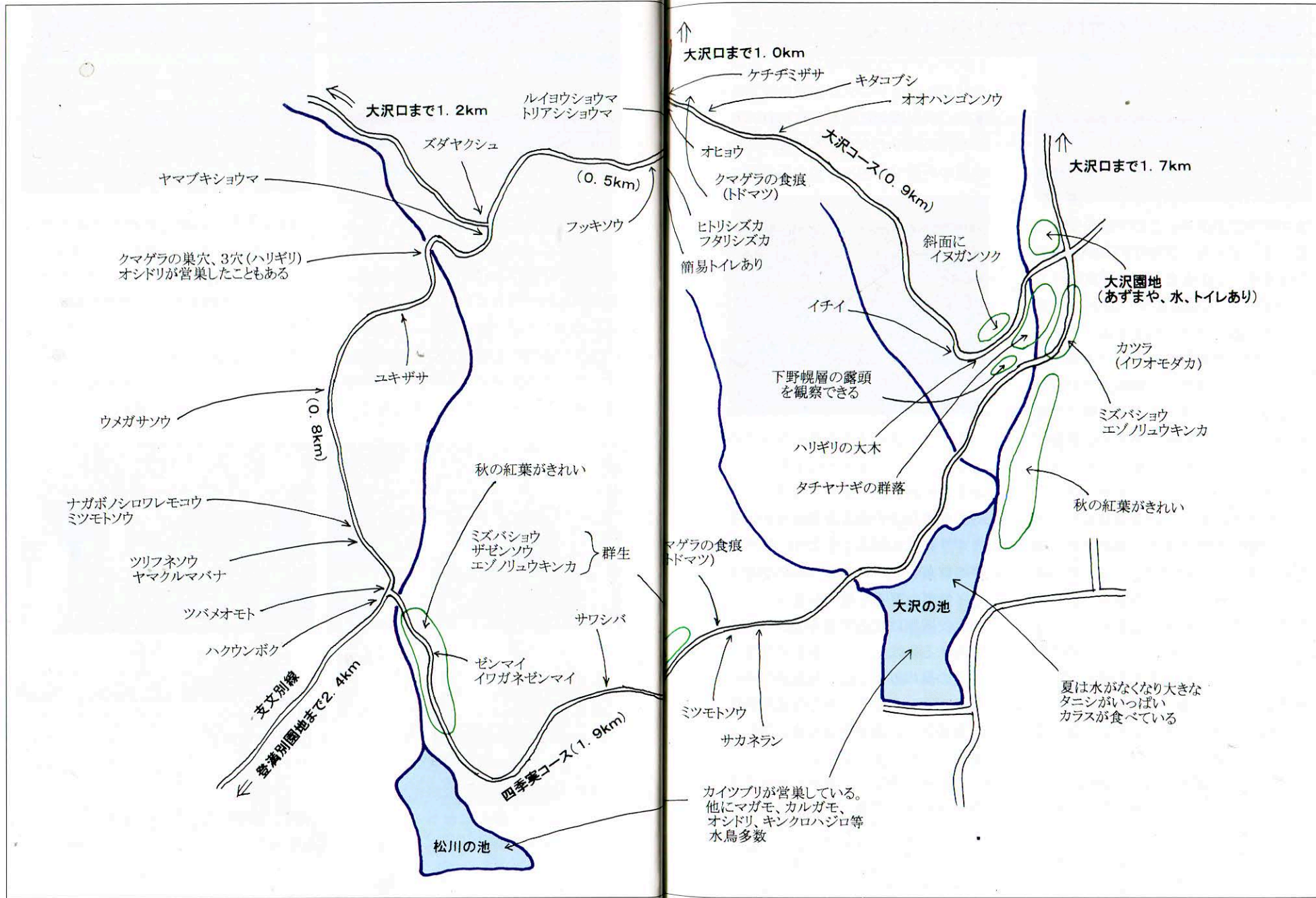
ができます。松川の池や大沢の池では、カイツブリが営巣しています。

大沢の池をすぎて、タチヤナギの林の手前の左側には下野幌層を観察できる露頭があります。タチヤナギの林の中の湿地帯は、春にミズバショウやエゾノリュウキンカが咲きみだれます。この林をぬけると大沢園地に着きます。



【みどころ】

- ・エゾユズリハコース…コース名のとおり、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、広葉樹林、アカエゾマツとトドマツの人工林がみられます。
- ・四季美コース…広葉樹や針葉樹、タチヤナギ群落、ミズバショウ群落などが見られます。
- ・大沢園地…豊かな樹木の中の林間園地です。典型的な溪畔林の部分もあります。小鳥や昆虫も多く見られます。あずまや、水飲場、トイレの設備があり、利用者の多い場所です。



大沢口～大沢園地～カツラコース

大沢口から100m程進み、大沢十字路に出ます。大沢十字路には幹にアリ路のついたトドマツやコブニレがあります。まっ直ぐに進むと、右側にはシナノキの大木、左側にはトドマツとアカエゾマツがあり、ここでは手で触って、トドマツとエゾマツの違いを観察できます。このあたりでは春にニリンソウがよく見られます。また、大沢コース、カツラコースともに、ミドリニリンソウを観察するポイントが、あちこちにあります。右側のカラマツの人工林、左側トドマツの人工林の中を進むと、やがて明るい感じの広葉樹の林になります。春から夏にかけては、カラフトダイコンソウ、オオダイコンソウ、ダイコンソウの3種類のダイコンソウが区別できます。道の両側の小湿地帯では一面にはびこっているスギナの中にネコノメソウがあり、秋にはアオミズやミズも多く見られます。このあたりから、エゾユズリハ、志文別コース方面へ分岐点までの間は樹木の種類が多く、勉強になります。

分岐点にはベンチとトイレがあります。左側の道に入り、トドマツの人工林の中を大沢園地に向かいます。

その間、所々にあるキタコブシやハクウンボクの花は春先にはとてもきれいです。トドマツの人工林をぬけると道が明るくなり、このあたりから

常緑低木のエゾユズリハが目立ってきます。大沢園地に近付くにつれハルニレやミズナラの大木が多くなり、また歩道の両側では色々な幼木が観察できます。



冬にはミズナラの冬芽にジョウザンミドリシジミ、アイノミドリシジミの卵を見つけることができます。

大沢園地の手前の坂ではイチイやハリギリの大木がみごとです。タチヤナギの群落を眼下に眺めながら坂を下るとイヌガンソクも見られます。

大沢園地にはあずまやもあり、ひと休みするにはちょうどよい所です。

沢の奥のガケでは、以前カワセミが営巣しました。カツラの大木が目になりますがこのカツラにも中ほどにイワオモダカが着生しています。

ヤエガワカンバ、ウラジロモミなどのめずらしい木も、この園地には植えられています。

大沢園地からは、カツラコースを歩いて大沢口まで戻りますが、その名の

とおり、カツラの多いコースです。左側を流れる沢に沿ってしばらくまっすぐな道で、道の両側にはウラジロモミが植えられています。

所々に立派なトドマツがあり、右側の斜面にはツバメオモトの小群落が何か所かあります。



道が左に曲り沢を横切って坂を上るあたりの右側は、秋になるとアキノウナギツカミが群生します。台風で倒れたカツラの朽ちた切り株からはヒコバエが出て世代交代をしています。右側のカツラの巨木を通り過ぎ坂を登り左側の窪地では、春のミズバショウがきれいです。この坂の途中でカツラコースをふり返ると秋にはすばらしい景色がひろがります。

通称「見返り坂」と呼ばれるこの坂は秋の紅葉の名所です。

【みどころ】

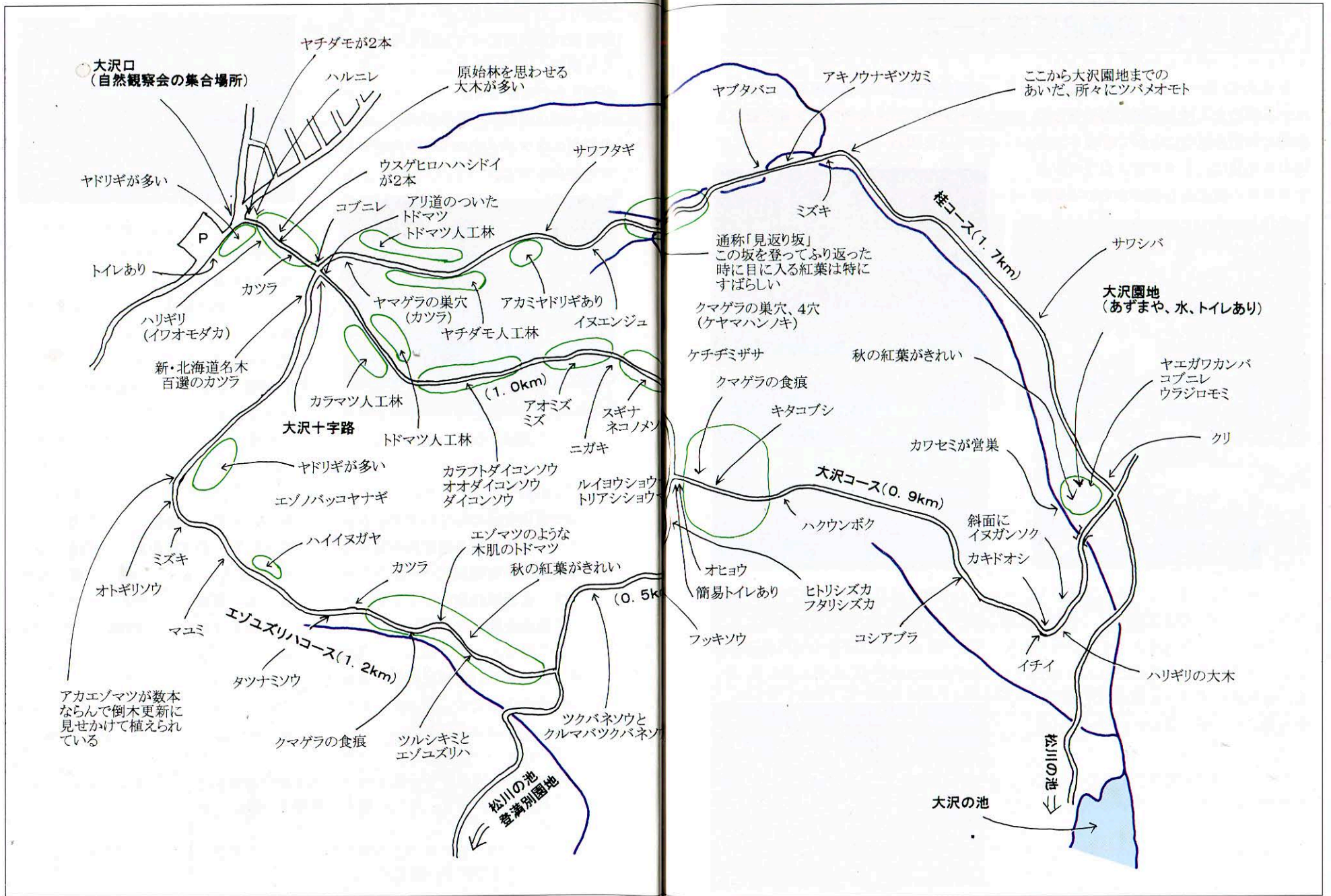
- ・大沢コース…カラマツ、トドマツの人工林や常緑低木のフッキソウ、エゾユズリハが見られます。また、樹木の種類も多く、木々を特定していけるコースです。
- ・カツラコース…コースの名の通りカツラの大木が見られます。沢や坂の変化もあり、昆虫や野鳥の観察ができます。



坂を登り切って少し行くと右側に20m程の間隔でサワフタギが2本あります。別名ルリミノウシコロシともいいますが、秋に瑠璃色のとてもきれいな実をつけます。左側の林が開けた所は奥の木にヤドリギが多くついているのが観察できます。この場所のヤドリギはアカミヤドリギです。

右側のトドマツの人工林、左側にヤチダモの人工林が続き、点在するカツラを見上げながら進むと、大沢十字路が見えます。十字路の手前のカツラにはヤマゲラの巣穴があります。歩道のすぐ脇で、高さ2～3mぐらいなので、よく観察できます。

大沢十字路から左に曲がると100mほどで大沢口です。



瑞穂幹線～瑞穂連絡線コース

車止めのゲートから大沢分岐までは、左側に人工林、右側に自然林と対象的な林相を見ることができます。左側の人工林は、トドマツ、カラマツ、ヤチダモの順にあらわれますので見ていきましょう。

自然林の中では、イワガラミ、ツルアジサイ（ゴトウヅル）、ツタウルシ、ヤマブドウを見ることができます。幹、葉、花の違いの観察ができるでしょう。



ゲート付近には、ミズキ、アオダマがあり、コース半ば左側には、ミズタマソウやウシタキソウによく似たミヤマタナデの群落も見ることができます。また同じくコース途中の左側奥に道南地方が北限とされている常緑低木のヒメモチがあります。

20年前と最近の調査のどちらにもヒメモチは確認されていませんので私たちの発見のようです。

大沢分岐までの途中には、ところどころに、ヒトシリズカやクルマバソウ

などが群落をつくる場所があります。ツチアケビ、エゾスズラン等も確認されています。



大沢分岐付近には、野幌ではあまり見られないサワフタギもあります。ミゾソバ、ケチヂミザサもこの付近で群落を作っています。



このコースは樹木あてクイズが5問設定されています。わりと簡単なのでチャレンジしてみてください。

大沢分岐から、瑞穂の池までは森が深くなります。こちらにも10問の樹木あてクイズがありますが、難問ぞろいです。クイズの木が大木なので、葉が高い所にあつて、すぐにはわかりませ



ん。木の肌や枝ぶりを参考にして挑戦してみてください。

オオカメノキによく似たミヤマガマズミがあります。秋には、アケボノソウが所々に出ています。また、ミヤマヤブタバコ、ヤブタバコ、アケボノシュスランもこのコースの途中で見ることができます。



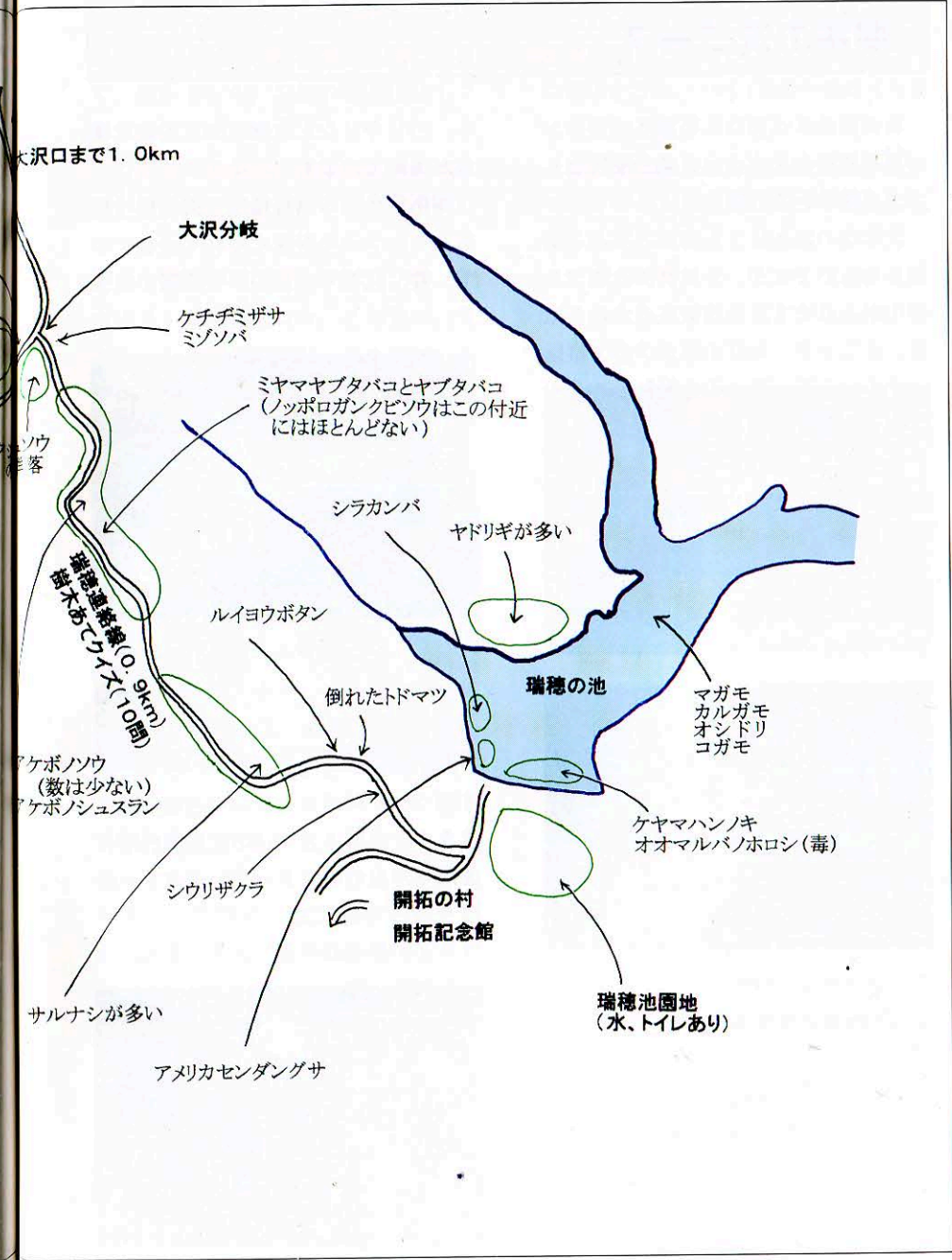
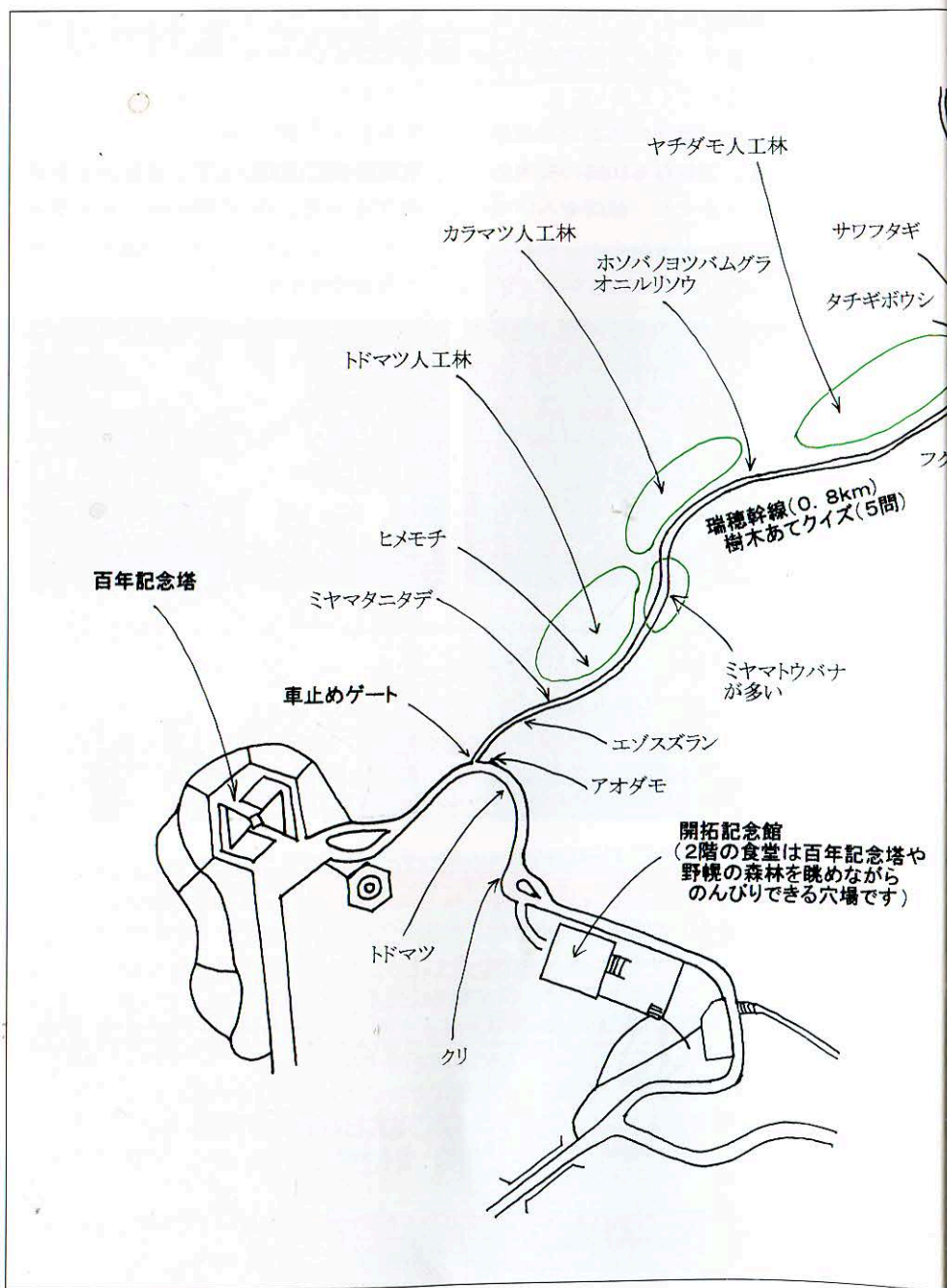
【みどころ】

- ・瑞穂幹線…人工林と自然林の比較をしたり、林床の草花を搜しましょう。
- ・瑞穂連絡線…広葉樹の二次林、針広混交林を見て樹木あてクイズをしながら歩を進めると、瑞穂の池に着きます。

コヤブタバコ、ヤブタバコ、ノッポロガンクビソウ、ミヤマヤブタバコ

キク科、ガンクビソウ属のこの四種は、森林公園内で見ることができます。これらは、多年草または1年草で、葉は互生します。

- ・コヤブタバコ…頭花は下を向き、草丈80cm前後で2年草。
 - ・ヤブタバコ…主幹は高さ50-100cmで先が止まり、上部から放射状に長大な枝を開出し、さらに枝をわけて、その葉腋に頭花をつける。
 - ・ノッポロガンクビソウ…野幌雁首草（頭花の形がキセルの雁首に似る）葉は裏面に無数の腺点があり、下葉は大形で基部は心形にくびれる。
 - ・ミヤマヤブタバコ…頭花は下向で、基部に葉状の多くの苞がある。下部の葉は卵状長楕円形で基部は急に細くなる。
- ガンクビソウ属には、この他に、オオガンクビソウ、サジガンクビソウ、ヒメガンクビソウ、ホソバガンクビソウ、コバナガンクビソウなど約20種あります。



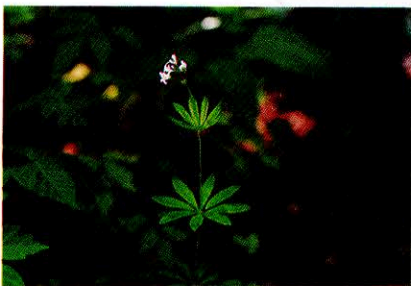
開拓の沢コース

森の自然教室前は、私たちボラレンが自然観察会をするとき集合場所としてよく使うところです。

駐車場のほかに、ちょっと戻ると植栽したのですが、サワグルミやツリバナがあります。自然教室のまわりには、オヒョウ、ニガキ、シラカンバ、ナナカマド等、葉に手を触れることのできる大きさの木が多くあります。

一度道路の両側が開け、芝生となり、それから森の中に入っていきます。左側にはシロザクラがあります。

右側で春先にクルマバソウとオククルマムグラが並んで出ていますので比較するのに便利です。



正面の車止めのゲートから右に向かって開拓記念館の裏へいきます。

この途中で立派なトドマツが一本あります。クリの木を右に見ながらつきあたりを左に曲がると開拓記念館が見えてきます。

開拓記念館の横の森には、アズキナシ、イタヤカエデ、ミズナラ、シナノ

キ、ハリギリなど北海道の代表的な樹木が並んでいます。

開拓記念館の前庭には北海道には自生しないケヤキが植えられていますので、幹、枝振り、葉の形を観察できます。



また、記念館の横の森は朝夕にはフクロウやクマガラがよく飛んでくる場所です。

開拓記念館を通過、右側の駐車場の手前ではウダイカンバが間近に観察できます。ウダイカンバの反対側の階段を降りて森の中に入っていきます。階段を降りた所には、秋にツリフネソウ、ミゾソバの群落が出現します。



木では、カツラ、エゾニワトコ、オオカメノキなども見ることができます。坂を下って、左側の斜面にはトクサが群生しています。

このあたりから、きびたき橋、せきれい橋の間に、最近めつきり数を減らしているエゾタンポポがあります。きびたき橋の所では、ハンゴンソウ、ナガボシシロワレモコウ、その先の、せきれい橋までの間には、コナスビ、ムカゴイラクサ、シロツリフネソウ、アオミズ、ヒメヘビイチゴ等、季節によって色々な草花をみることができます。



沢をはさんで左側に植林されたトドマツ林を見ながら階段を登っていくと途中でユキザサ、ミヤマウツボグサなどがあります。階段を登り切るとサワシバがあり隣接する「北海道開拓歴史の村」のフェンスにぶつかります。左側の道をしばらくフェンス沿いに歩きます。

【みどころ】

・開拓の沢コース…前半は北海道の代表的な樹木の観察ができます。また途中には、湿地帯があり、ケヤマハンノキやヨシ（イネ科）、アブラガヤ（カヤツリグサ科）などが見られます。

このフェンス沿いは、雌雄異株の木が2種類見られるところです。キハダの雌木と雄木、ハイヌガヤの雌木と雄木が短い距離の間に並んであります。

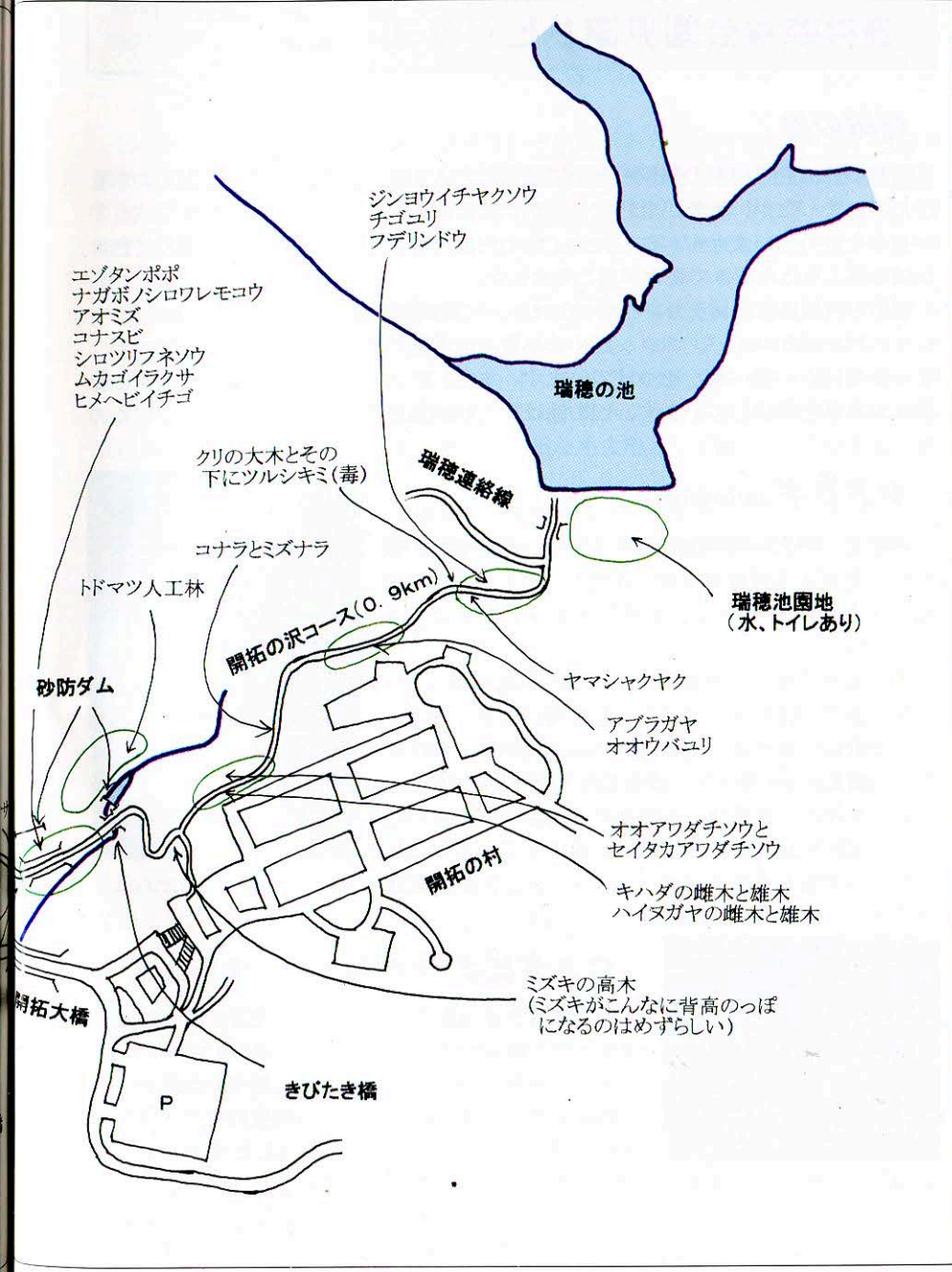
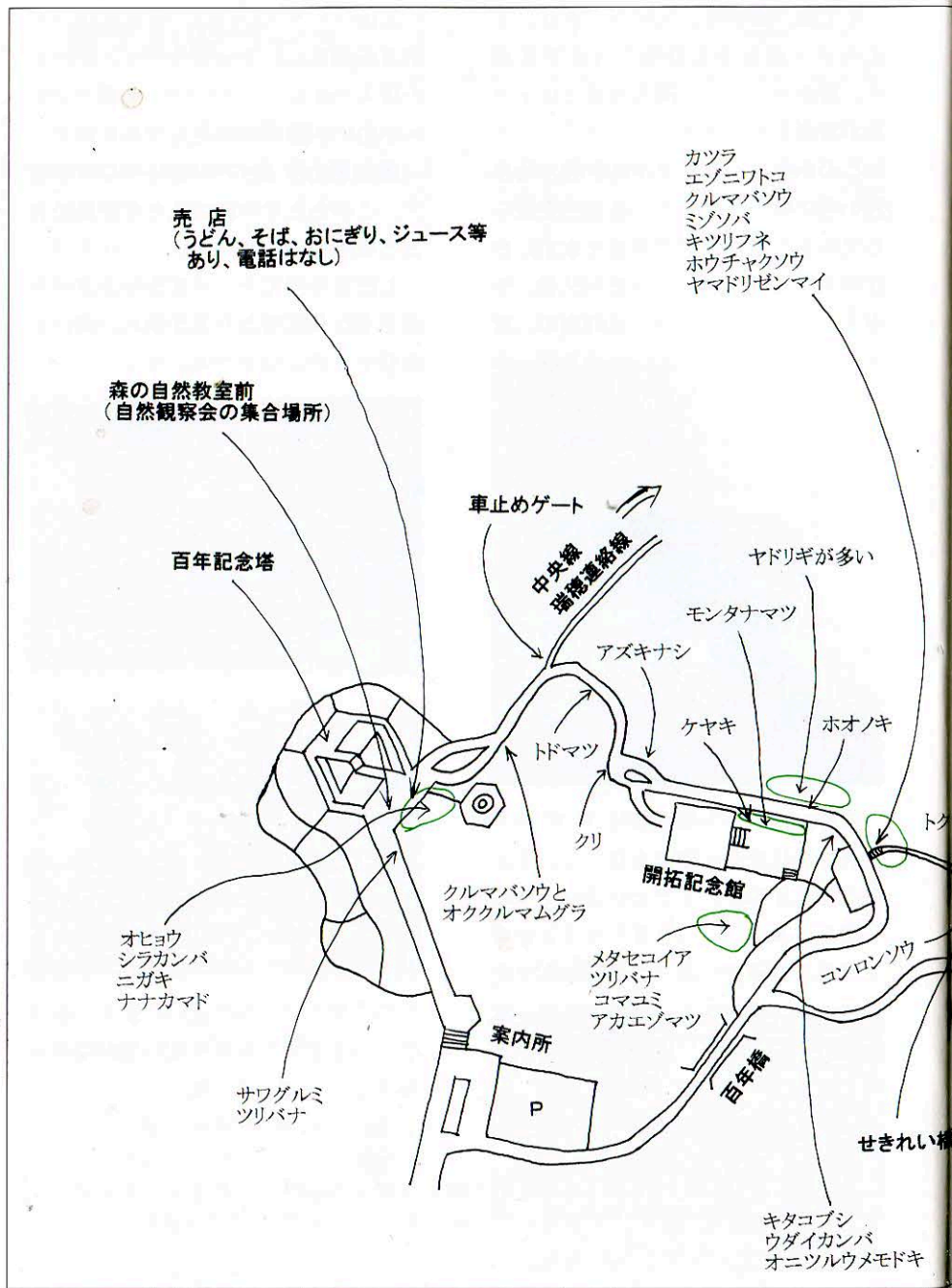
道は再び、森の中に入っていきます。このあたりの森は色々な野鳥に会える確率の高い所です。

しばらく行くと、ミズナラとコナラが2本ならんでありますから、違いを観察するのに最適です。



フェンスから離れて左に下りはじめるところに、クリの巨木があります。窪地を横切ってすこし登ると瑞穂の池まではもう少しです。

途中にあるハクウンボクは、春にきれいな花を咲かせます。道の左側の斜面は色々な草花を見ることができます。チゴユリ、フデリンドウ、ジンヨウイチヤクソウ等が見られます。以前はツバメオモトもありましたが盗掘され消えてしまいました。



野幌森林公園見聞トピックス

瑞穂の池

瑞穂の池は農業用水の確保のために造られた人工池で、春から秋まで多くの水を貯えていましたが、堤防が老朽化し満水状態に耐えられないことがわかり平成6年から水を貯めていません。このため、池の内側の今まで水面下にあった部分に色々な植物が入り込んできて変化が起きました。

堤防の内側には、シラカンバやケヤマハンノキが林を形成しつつあります。

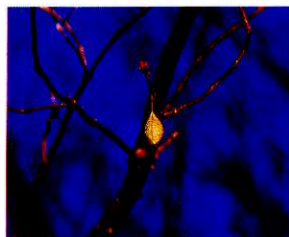
ナス科のオオマルバノホロシがやはり堤防の内側の石の間から数箇所出ている、真っ赤な目立つ実（毒）をつけています。また、アメリカセンダングサが左側の斜面に大群落を形成しています。この池は、これからどのような姿に変わっていくのでしょうか？

ヤドリギ (mistletoe)

漢字で、宿木・寄生木と書くとおり、他の樹木の枝や幹に寄生する常緑樹です。ただし、自らも葉緑素を持ち光合成をするので、半寄生ともいえるところでしょうか。

実は黄色ですが、アカミヤドリギの実は橙色～赤色になります。クリスマスツリーにするヨーロッパトウヒとともに、ヨーロッパではクリスマスの飾りつけには欠かせないもので、12月になると店先にヨーロッパトウヒの生木とともに山のように積まれるそうです。

ヤドリギの下をくぐると幸せになれるという言い伝えがあるので、人が必ず通る玄関などに飾られます。またこの木の下では異性にキスをして、とがめられないという習慣もあるそうです。クリスマスソングの歌詞にもたくさん取り上げられ、クリスマスの時季に歌われます。



ウスタビガ (ヤマムユガ科)

幼虫は4月下旬から5月上旬にふ化し、7月頃終令幼虫となり繭をつくります。食草はクリ、ナラ、ハンノキ、サクラ、カエデ等です。繭は鮮やかな緑色で長さ35mmほど、上部の羽化口は15mm程度の幅で、下部に水ぬきの穴があります。この繭のことをヤマカマス（山吠）と呼んでいます。10月から11月にかけて羽化し成虫になりますが、口器は退化していて成虫としての寿命は1週間ほどしかありません。雄は7.5cm～9cmの大きさと、黄褐色～橙褐色、雌は雄より少し大きく8cm～11cmで黄色です。いずれも秋

の黄葉や落葉に完全に溶け込んでしまう見事な保護色となっています。

カマス（吠）：穀物や石炭をいれるむしろの袋

アライグマ

1980年代に各地でアライグマを見たという情報があり、道内でも数年前、恵庭方面で話題になっていました。最近では、野幌森林公園でも足跡を見つけることができます。動物作家の作品「あらいぐまラスカル」によって世界中にペットとして広まり、また「子ども動物園」などで飼われていたものが野生化したと考えられています。

このような例はイタチ科の動物にも見られます。イタチ科の動物はエゾイタチ（オコジョ）、コエゾイタチ（イイズナ）、クロテン、カワウソの4種がもともと道内に生息していました。普通、イタチと呼んでいるのはホンDOIタチで、これは明治以降、本州からやってきたものです。その結果カワウソが減少し昭和初期にはほぼ絶滅したと考えられています。そして、戦後毛皮用として輸入されたのがミンクでした。

さらに本州からホンDOTENが進出し、またチョウセンイタチ（コリンスキー）もやって来るといった具合に、人間の活動の広域化、多様化が動物の世界に大きな変貌と混乱をもたらしているようです。

トンボ



野幌森林公園では、トンボが豊富なことが意外に知られていません。森林公園内には、30種以上のトンボが棲んでおり、早春から晩秋まで見ることができます。晩夏のノシメトンボやアカネ類は、ごく普通に見られるものですが、珍種や稀種も少なくありません。

また、子どもたちの目の高さから見ると、地面に近い所にはエゾマイマイカブリやセダカオサムシ、オオルリオサムシ、ヒラタシデムシなどカタツムリや小動物の腐肉を食べる昆虫を見つけることができるかもしれません。

フィールドサイン

雪どけの頃になると、木の幹のまわりや枝に細かくノミで削ったような跡やフン（エゾヤチネズミ）や、クルミの実に穴があいたもの（エゾアカネズミ）あるいは、枝先がスパッと鎌やカッターで切られたようなウサギの食痕などが見られます。冬の間の深い雪の中での彼らの生活痕は、公園内のあちらこちらで見ることができます。

動物たちの生活痕（フィールドサイン）は、食痕、フンとペリット、足跡、巣と巢穴、死体とさまざまな形で残されています。



冬期間の公園内は雪の上に残された動物たちの足跡をたくさん見つけることができます。動物の種類はもとよりその動物がどのような生活行動をしていたかを推測することもできます。フンやペリットは、動物たちが何を食べているかの情報を得ることができます。その他に鳥の羽なども気をつけて歩くと発見できます。野幌森林公園は冬期間も観察歩道の整備がいきとどいていて、フィールドサインの観察場所として最適です。

サルメンエビネ考

野幌森林公園では、今までに何度も植物調査がおこなわれていますが、最近の2回の調査(1973年¹⁾ 1992年²⁾)を見ると、ラン科の植物はそれぞれ14属21種と15属21種が確認されています。1974年から1992年までに新たに確認されたものが、ギンラン、エゾスズラン、ミヤマウズラ、クモキリソウ、トンボソウの5種ですが、1992年までの観察をまとめた北海道環境科学センターの村野紀雄氏は、その報文²⁾の中で、これらの新たに確認された自生植物は固体数が少なかったため、1973年以前に記録されなかったと考えられると述べています。逆に1973年にはあったが1992年で確認できなかったものがササバギンラン、ミヤマモジズリ、ジガバチソウ、フタバラン、タカネトンボの5種あります。

また、ミヤケランは1934年の調査³⁾の後確認されず、絶滅に瀕している種*です。

キンセイラン、サルメンエビネの2種は日本版レッドデータブックにも記載されていて、1992年までに確認されたラン科の植物のうちネジバナを除く全てが希少な種*、減少している種*とされています。

もう何年も前のことですが、自然観察会で私たちが、サルメンエビネを参加者に見せたことがあります。歩道から数歩笹やぶの中に入ったところで、よほど目を凝らして探さなければ見つけられない場所に1株あったのです。野生のランで固体数が少なく野幌森林公園の中では滅多に見られない等の説明に、参加者はめずらしいものを見せてもらったと感動した様子でした。しかし、数日後、サルメンエビネはその場から消えていました。めずらしいものだと言ったことが裏目に出たようです。植物愛好家の間ではエビネは人気が高く、高値で取り引きされているとも聞きました。それ以来、私たちは、自然観察会でラン科の植物を見つけても知らんぷりをして通り過ぎることにしています。

(注) *絶滅に瀕している種:

野幌森林公園地域では、なくなったか、なくなる寸前ではないかと考えられるもの²⁾

*希少な種:

野幌森林公園地域では、もともと固体数が非常に少ないと考えられるもの²⁾

*減少している種:

野幌森林公園地域では、明らかに減少しつつあると判断されるもの²⁾

観察会へのアプローチ

私たちは昔から森林の恩恵を受けながら生活してきました。人類の歴史は森林と共に歩んできた歴史だといっても過言ではありません。ところが、近年、科学の進展や社会の変化にともない森林の衰退が問題になってきています。森林は人間ばかりでなく地球上の生き物にとってかけがえのない大切なものであり、緑豊かな森林の保護維持に努める義務があります。

森林を保護するためにできること、それは森林と一体となることであり観察会は森林と一体となり、森林を理解する大切な場なのです。

(1) 自然保護と自然観察

■人と森林

静かな森林に入るとほっとします。森林は音の防音壁の役目を果たします。その結果として森林は人間の気分を和らげる働きもあります。樹木の幹や葉は汚染物質を吸着・吸収し大気汚染を減少させます。また、樹木は二酸化炭素を酸素に交換する巨大な大気交換器でもあります。

森林には、森林特有のおいがあります。このにおい(フィトンチット)は人間の交感神経の興奮を抑え気分を和らぐ状態を作り出す副交感神経を活性化させる作用があります。

森林浴は、ストレスなどの不調な体を正常に戻す働きがあります。

■自然観察の考えかた

自然を観察するということは、自然をありのままに見るところから発見します。ありのまま見るということは、事実を大切にすることだといえます。

私たちが自然を無意識に見るとい

ことは「見えた」という事実だけあります。目に映った自然を定着させる心の動きが観察という行為であり「見えた」から「見る」という段階の移行でもあります。このようなプロセスの中での観察によって何かがわかれば、さらなる興味がわき発見の喜びを得ることができます。

観察会、それは自然の中での知的レクリエーションだと言ってよく、そのさわやかさは、なにものにも代え難いものです。この体験を多くの人たちに広めたいものです。



[34頁の11) 参照]

(2) 観察会の運営

■計画

自然観察会は複数の人達の計画によって進められることが多々あります。この複数の人達の観察会に対するイメージはさまざまであります。

目的や動機、方法が異なる中で、のあまいな計画は、実施中に色々な手違いやトラブルが生じてきます。

そこで、観察会を計画するにあたって共通理解を図っておかなければなりません。

基本的な共通理解の観点とは、いうまでもなく、自然に親しみつつ自然について学び、かつ、自然の保護保全について考えていける態度を身につけていくことをベースに観察会を企画するということです。

自然観察会の基本をこのようにおさえると、樹木や草花の名を憶えることもさることながら、自然に親しんだり、自然を慈しむ心が育つことを願っての観察会の方が、よりボランティア・レンジャーとしての立場や考え方に沿うことになることと思うのです。

観察会を支える自然観の共有化を前提としたいものです。



〔自然観察会の三つの要素〕

- ・自然に親しむ（興味関心）
- ・自然を知る（知識）
- ・自然を守る（価値観）

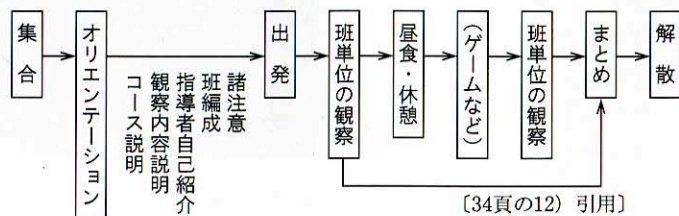
■運営実施と反省

・集合

企画者は実施20～30分前に集合し当日の実施計画を確認し合うミーティングが必要でしょう。そうすることによって、ガイドする意識も高まり、計画に欠落があった場合でも補完することができますし、当日の天候の判断も的確にできます。また参加者へのサポートも余裕をもって対応できます。

・オリエンテーション

観察会の流れの中で非常に大切な時間です。今日の観察会は何を目的として、どんな観点で観察するか等々参加者の期待を高めることができますし、



観察会のマナーについての注意も重要なことを落とさず知ってもらうよう配慮します。

・グループ行動

グループ数が多くなると前後の開きが大きくなったり、タイムスケジュール通りにいかなることがあります。下見の際はこの事を考えながら当日のスケジュールに沿って行うことが大切です。

・反省

オリエンテーションと同じく観察会のしめくりは重要な場面です。観察会を振り返り、復習したり観察の結果を資料として、自然の仕組み自然の保護保全の話で締めくりたいものです。

■観察会の補完（観察会P-D-S）

観察会の準備で一番大切なことは下見です。コースの選定や植物・動物、地形、季節の変化を見定めて観察会のテーマやポイントを明確にしていきます。

また、下見はボランティア・レンジャーとしての力量を高める研修の場

としても位置づけたいものです。

観察会は「採取しない観察会」が原則です。オリエンテーションの時必ずこの事にふれましょう。採取しないで観察することが、生き物を見る一番よい方法です。

観察会はまた、参加者すべての交流の場として考えたいものです。

自己紹介に始まり、協力して観察する場面を設定すると連帯の意識も生まれるでしょう。観察会を通して新しい人間関係ができれば、こんなすばらしい事はありません。そしてお互いに感動を分かち合える雰囲気醸し出されれば最高です。



〔34頁の13) 引用・参照〕

観察会計画の基本

観察会を計画するときは、5W1Hの原則があります。これは、When、Where、Who、What、Why、とHow、のことです。

When（いつ）：いつ（年、月、日、時間）行うか決めます。

Where（どこで）：その観察会は、どこで行うのが一番効果があるか。

Who（だれが）：対象者はどのような人たちでしょうか。

What（なにを）：観察会のプログラムをどう考えたらよいでしょうか。

Why（なぜ）：どのような目的で観察会を行うか把握します。

How（どのように）：具体的な観察会の手順や過程の細案を考えましょう。

(3) インタープリテーション

■理念と基礎

インタープリテーションとは「自然、文化、歴史（遺産）をわかりやすく伝えることであり、自然についての知識そのものを伝えるだけでなく、その裏側にある“メッセージ”を伝える行為、あるいはその技能」と定義されます。具体的には自然の発するメッセージをわかりやすく人々に伝え、自然のふれあいを通じて喜びや感動を分かち合う解説活動のことです。

環境基本法の中に、環境保全の基本の指針に「人と自然のふれあいの保全」があります。自然との付き合い方や自然の発するメッセージを伝えていくことが、インタープリテーションの基礎と言えます。

■目的と方法

インタープリテーションを実施する人を“インタープリター”と言います。インタープリターの働きは次の2点に注意しなければなりません。

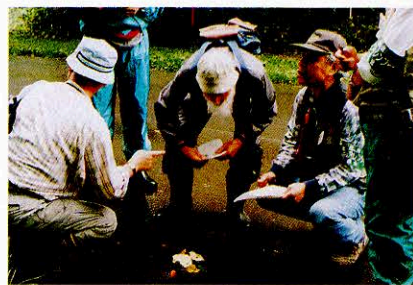
即ち、「現場」で行い、その場で参加者（ビジター）に直感体験を提供することです。合わせて次の目的意識を持ち参加者に接することです。

・場所とその関連

その場を大切に人々を育てつつ適正な利用をうながすこと。

・担当行政機関との関連

関係機関のイメージのPRと環境保全保護活動に参加するように奨励の啓蒙に努める。



・参加者との関連

興味を刺激啓発し、日常の生活に新しい視点を与えること。

■プランニング

インタープリテーションの主眼は教えることではなく、興味・関心を引き起こし、自然に対し主体的に働きかける態度を啓発することです。樹木名や鳥の名を次々と参加者に知らせ講義することではありません。インタープリターの持っている専門知識を得意げに参加者に語ることはありません。

インタープリテーションにはテーマがなければなりません。事前の下見によって観察した自然の様子に沿ってテーマを設定します。テーマのない観察会は目的を持たぬ会となります。結果として、その場その場での解説活動に終始していきます。

ある調査によると、参加者が嫌いなことは、喋りすぎ、専門的すぎ、だらだらし過ぎの無味乾燥の講義調のインタープリターだといわれています。

ビジターが五感を駆使し主体的に参加できるプランニングの工夫がなによりも大切です。〔34頁の14〕参照

動物・植物写真一覧

【動物】

クマガラ <i>Dryocopus martius</i> (キツキ科)	7 P 下
オオヒカゲ <i>Ninguta schrenckii</i> (ジャノメチョウ科)	8 P 左
サカハチチョウ <i>Arashnia burejana</i> (タテハチョウ科)	8 P 右
コクワガタ <i>Macrodercas rectus</i> (クワガタムシ科)	9 P 左
アマガエル <i>Hyla japonica</i> (アマガエル科)	9 P 右
ウスタビガ <i>Rhodinia fugax fugax</i> (ヤママユガ科) のマユ	26 P 左
ノシメトンボ <i>Sympetrum infuscatum</i> (トンボ科)	27 P 左
フキバッタ <i>Parapodisma sapporensis</i> (バッタ科) の食痕	27 P 右

【植物】

エゾユズリハ <i>Daphniphyllum macropodum</i> (トウダイグサ科)	10 P 左
オトギリソウ <i>Hypericum erectum</i> (オトギリソウ科)	10 P 右上
ナニワズ <i>Daphne kamschatica</i> (ジンチョウゲ科)	10 P 右下
ツバメオモト <i>Clintonia udensis</i> (ユリ科)	11 P 左上
ルイヨウボタン <i>Caulophyllum robustum</i> (メギ科)	11 P 右上
ハイイヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> (イヌガヤ科)	11 P 左下
エゾノリュウキンカ <i>Caltha palustris</i> (キンポウゲ科)	11 P 右下
フッキソウ <i>Pachysandra terminalis</i> (ツゲ科)	15 P 左
エゾニワトコ <i>Sambucus sieboldiana</i> (スイカズラ科)	15 P 右
ツルアジサイ <i>Hydrangea petiolaris</i> (ユキノシタ科)	18 P 左
ヒトリシズカ <i>Chloranthus japonica</i> (センリョウ科)	18 P 右上
ミゾソバ <i>Polygonum thunbergii</i> (タデ科)	18 P 右中
イワガラミ <i>Schizophragma hydrangeoides</i> (ユキノシタ科)	18 P 右下
アケボノシユスラン <i>Goodyera foliosa</i> (ラン科)	19 P 左
アケボノソウ <i>Swertia bimaculata</i> (リンドウ科)	19 P 右
クルマバソウ <i>Asperula odorata</i> (アカネ科)	22 P 左
ツルシキミ <i>Skimmia japonica</i> (ミカン科)	22 P 右上
エゾタンポポ <i>Taraxacum hondoense</i> (キク科)	22 P 右下
ツリフネソウ <i>Impatiens textori</i> (ツリフネソウ科)	23 P 左
フデリンドウ <i>Gentiana zollingeri</i> (リンドウ科)	23 P 右
アカミヤドリギ <i>Viscum album</i> (ヤドリギ科)	26 P 右

(写真撮影 佐藤健一 藤田正次)

参考及び引用文献

- 1). 北海道石狩国野幌森林の植物学的研究
館脇操・五十嵐恒夫 札幌営林局 1973年
- 2). 野幌森林公園地域における高等植物出現種について
村野紀雄 北海道環境科学センター所報 1992年
- 3). 野幌国有林植物調査書 館脇操・松江賢修 北海道林業試験場 1934年
- 4). あつべつ見聞録 札幌市市民部総務課広聴係編集
- 5). 森へのいざない 北海道野幌森林公園事務所
- 6). 野幌森林公園要覧 北海道野幌森林公園事務所 1994年
- 7). 地形と地質(札幌文庫) 札幌市教育委員会 1996年
- 8). あつべつ区再考(自然・ひと・歴史) 札幌市厚別区編集 1994年
- 9). 野幌森林公園の野鳥
(北海道ボランティア・レンジャー協議会会報No.38) 1996年
- 10). うすばきNo.82 北海道昆虫同好会会報 1993年
- 11). 自然観察の仕方 ニューサイエンス社 1988年
- 12). 自然観察ハンドブック 思索社(日本自然保護協会) 1987年
- 13). 森で遊ぼう 北海道林業改良普及会 1993年
- 14). インタープリテーション入門 小学館 1994年
- 15). 森の昆虫誌 坂本与市著 未来社 1986年
- 16). たぬきの冬 石城謙吉著 朝日新聞社 1981年
- 17). 北海道野性動物の痕跡を読む 北海道新聞社(エコネットワーク編) 1994年
- 18). 昆虫ウォッチング 平凡社(日本自然保護協会) 1996年
- 19). 私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録—北海道野鳥愛護会 1988年

編集後記

1986年12月、第1回ボランティア・レンジャー育成研修会受講の有志が「エゾマツ会」を設立、途中現在の名称に改め活動を進めてきた本会も、設立10周年を迎えました。この節目にあたり、1995年4月の総会で10周年記念事業として「野幌森林公園自然観察ガイドブック」を作成することが承認され、2年間の準備作成期間を経て本書が出来上がりました。

内容については、野幌森林公園にスポットをあて、観察会で実際に使用できるよう心がけましたし、各地の観察会においても本書を参考にして、観察会の運営ができるよう編集しました。

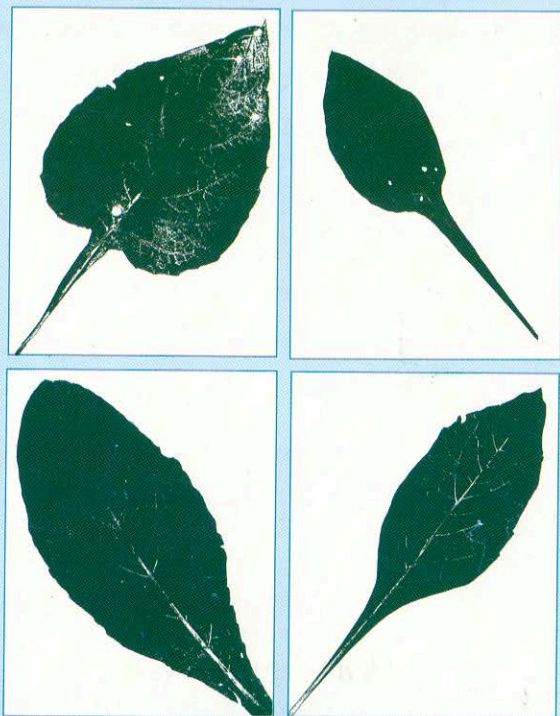
作成にあたって、会員の方々はもとより関係機関からの資料や参考文献の提供等、多くの協力をいただきましたことに感謝申し上げます。

——執筆・協力・編集者——

佐々木幸夫	佐藤 健一
樋口 達郎	三崎 篤
田村 允郁	五十嵐一夫
瀧谷 尚弘	大槻日出男
藤田 正次	川端 功治

野幌森林公園自然観察ガイドブック

編集・発行	北海道ボランティア・レンジャー協議会
発行責任者	大友 健
発行日	1997年5月1日
印刷所	上野印刷社



左上：ノッポロガンクピソウ
右上：ミヤマヤブタバコ
左下：コヤブタバコ
右下：ヤブタバコ